

対人葛藤場面におけるソーシャルサポートの交換 ー自己愛パーソナリティの観点から見た青年期の相談関係ー¹²

加藤 仁

キーワード：相談関係の構築、個別支援、ソーシャルサポート、自己愛傾向、対人葛藤

問題

社会関係における資源であるソーシャルサポート（以下、サポート）を適切に交換することは、精神的健康を維持するうえで重要である。一方、サポートを歪めて認知してしまうことは、適切なサポートの交換を阻害すると考えられる。サポートを歪めて認知しやすいパーソナリティとして、自己愛傾向が挙げられる（e. g., 加藤・五十嵐・吉田, 2013）。自己愛傾向（narcissism）はもともとDSM-IV-TR（American Psychiatric Association, 2000）にみられる自己愛性パーソナリティ障害の概念から発展した一般パーソナリティである（小此木, 1981）。パーソナリティとしての自己愛傾向に関して、佐方（2011）は、「傲慢で自惚れが強く、自分の素晴らしさを誇らしげに顕示すること、自分だけは特別であると信じており、他者から賞賛や是認、特別な取り計らいを当然のように求めながらも、他者への関心や共感、思いやりに欠けること、自分の目的を達成するために他者を利己的に利用すること、さらには妬みの感情にとらわれていること、などを特徴とする」と述べている。

自己愛傾向そのものは誰もが持つ特

徴・パーソナリティであり自己を維持するシステムである一方で、その対人認知の特徴のために対人関係において不適応的に機能することもある（小塩, 2008）。自己愛傾向がもたらす歪んだ認知傾向に関して Campbell & Green（2008）は、自己愛傾向の高い個人は自身の利益のために他者を利用すると指摘している。また、自己愛傾向の高い個人は誇張された自己概念を維持するために他者からのフィードバックや情報を操作する傾向があることが指摘されている（Morf & Rhodewalt, 2001）。以上のことから、自己愛傾向の対人不適応の問題の背景には主観的な自己評価の高さと対人認知の歪みがあり、これに基づいて他者とのサポートの交換関係が阻害される可能性が考えられる。本研究では、自己愛傾向の高い個人の自己評価が脅かされた際に、対人不適応行動が表出すると仮定し、自己評価に対する脅威の場面におけるサポート認知について検討する。

自己愛傾向と自我脅威

他者からの評価によって対人関係上の不適応状態へ陥るプロセスに関して、Baumeister, Smart, & Boden（1996）は自己本位性脅威モデルを提案している。

このモデルでは、高揚した己評価が他者からの評価に脅かされることによって引き起こされる自己本位性の脅威（以下、自我脅威）が問題となっており、自他の評価のずれによって自我脅威状態にさらされた際に自己評価を操作しようとする結果、攻撃行動や対人関係からの撤退に結びつくと考えられている。Bushman & Baumeister (1998) は、自己愛傾向と攻撃性との関連を検討する際に自己本位性脅威モデルを用いている。この実験では、参加者に記述させたエッセイを他の参加者に評価させることで自我脅威を誘発し、別の課題で競争相手に与える騒音を決定させることで攻撃性の表出としている。その結果、攻撃性に対する自我脅威の有意な影響が認められ、自己愛傾向の高い個人は自我脅威を受けて攻撃行動をとることが明らかとなった。この結果を中山 (2008) の自己愛的自己調整プロセスモデルに当てはめて考えると、自己本位性脅威モデルにおける自他の評価のずれの評定やその後の対処方略に、自己愛傾向が調整変数として影響を与えている可能性が示唆される。

また、自我脅威状況下での自己愛傾向とサポート認知の関係について、加藤他 (2013) では自己愛傾向が自我脅威状況下の知覚されたソーシャルサポートに及ぼす影響を検討している。この研究では、参加者は自我脅威状況もしくは統制状況に関しての自由記述の前後で知覚されたソーシャルサポートを測定された。その結果、自我脅威条件において自己愛傾向は情緒的サポート (i. e., なぐさめ, はげまし) の提供可能性を有意に減退させ、

情動的サポート (i. e., 情報, アドバイス) の提供可能性を有意に増大させていた。ここから、自己愛傾向の高い個人は自我脅威を受けて情緒的サポートの提供可能性を低下させることで優越感・有能感の資源の流出を防ぎ、自我脅威を受けて情動的サポートの提供可能性を上昇させることで対人関係上の優位性を確立すると考察されている。

以上より、自己愛傾向の高い個人は自我脅威状況下でサポートを歪めて認知することで自己誇大感を維持しており、対人葛藤場面において自我脅威が引き起こされる結果、他者との認識のずれやサポート認知の歪みが顕現すると考えられる。

目的

本研究では、自我脅威状況に陥った個人が周囲からのサポートをどのように認知するのかについて検討する。中山 (2008) が述べるように、個別の文脈でどのような意味を持つのかを扱うことで自己愛傾向が自我脅威を受ける場面の詳細な検討が可能となると考えられる。また、日常場面における実際のサポートや必要なサポートを分析することで、自己愛傾向の高い個人に有効なサポートに関しての示唆が得られると考えられる。適切なサポートを得るためには、不適応状態にある本人自身の周囲にサポートが存在することが重要である。そして、そのサポートが利用可能であることを本人が認識している必要がある。一方、日常生活において対人不適応が生じているにもかかわらず、それに気付かなかつたり、気付いていても放置したりすれば問題解決には至

らず、個人の精神的健康が阻害されてしまう。また個人にとどまらず結果として個人を取り巻く環境の悪化も招きかねない。そこで、サポートを本人や周囲はどのようにとらえ、どのように関わっているのかを扱うことで、日常生活において支障が生じる状況を記述・分析し、相談行動の促進や適切な周囲のサポート提供に貢献できると考えられる。

本研究では、面接調査を行い具体的な自我脅威場面を記述することでこれらを明らかにすることを目的とする。そこで、次のリサーチクエスションとその下位項目を設定した。

RQ: 自己愛傾向の高い個人が自我脅威を感じた場合、どのようなサポートのやり取りがなされるか。

1. 自己の傷つきを感じたときの状況とその感情はどのようなものか。
2. どのようなサポートが利用可能であるか。また、どのようなサポートを実際に利用しているか。

方法

面接参加者

面接調査への協力要請に応じた私立大学生 10 名（男性 4 名、女性 6 名、平均 20.20 歳）を面接調査の対象とした。

面接時期・手続き

面接調査は、2011 年 11 月から 12 月にかけて、筆者による一対一の半構造化面接で行われた。面接の所要時間は 15 分から 40 分（平均約 25 分）であり、面接記録は面接参加者の承諾を得て IC レコー

ダーに録音した。

また、面接調査の開始前に、自己愛傾向を測定するための質問紙（NPI-S; 小塩, 1999）に回答してもらった。質問紙は、30 項目を全て 5 件法（「1: 全く当てはまらない」～「5: とてもよく当てはまる」）で回答するものであった。この尺度は自己愛傾向の下位因子として、「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」3 因子を想定しており、因子得点の高低によって 4 つの自己愛傾向のパターンに分類可能である（自己愛傾向の高低×主張／注目優位）。NPI-S は総得点が高いほど、自己愛傾向が強いことを意味する。

面接内容

面接内容は、Table 1 の通りであった。質問カテゴリとその質問内容は、本研究と同様の対人葛藤場面における自我脅威状況を扱った芝本（2006）を参考に、リサーチクエスションに基づいて筆者が作成した。

Table1. 面接内容とその質問カテゴリ

「ここ最近（2～3 週間以内）のことで、誰かに何かされた、もしくは何か言われたことで、強い否定的な感情を感じたときを思い浮かべてみてください」	
具体的場面	「それはどのような状況（場面）でしたか」
感情	「そのときどのような感情を抱きましたか」
対人認知	「相手や周囲に対してどのように感じましたか」
対処方略	「その気持ちをどのように扱いましたか」
感情の収束	「その気持ちはその後どうなってい

	きましたか」
必要な	「そのとき何があったら（誰がいた
サポート	ら）良かったと思いますか」
実際の	「そのときどのようなことを（誰に）
サポート	してもらいましたか」

分析手続き

面接調査への参加者のうち、同じ運動系部活動に所属している3名（男性2名，女性1名）を分析対象とした。分析対象3名のICレコーダーに録音された面接内容を逐語録として書き起こした。次に，Table 1の7つの質問カテゴリに従って，各ケースの逐語録の内容を分類した（Table 2）。また各ケースをリサーチクエスションにもとづいて，具体的文脈としてトランスクリプト（場面・サポート）を抽出した（Table 3, 4）。なお，この手続きは全て筆者によって行われた。

結果

分析対象

分析対象者3名のNPI-S総得点の平均値（SD）は，99.67（6.03）であった。なお，本研究における面接参加者のNPI-S総得点の平均値（SD）は，87.78（15.13）であった。

自己愛傾向のタイプ分類

小塩（2002）にならい，NPI-Sの各下位尺度得点を用いて「自己愛総合」および「注目—主張」得点を参加者ごとに算出し，各得点の高低によって分析対象者を4つの群に分類した。その結果，自己

愛傾向高・主張優位群1名，自己愛傾向高・注目優位群2名となった。小塩（2002）によれば，それぞれの自己愛傾向のタイプの特徴として自己愛傾向高・主張優位群は，対人恐怖傾向を示さず言語的な攻撃を行い，個人志向的で精神的に健康である傾向がある。また，自己愛傾向高・注目優位群は，相対的に対人恐怖的で間接的な攻撃を行い，社会志向的で精神的不健康を示す傾向にある。

コードマトリックス

Table 2に各ケース内容をまとめたものを示す。

Table 2. 各ケースの内容

	ケース1	ケース2	ケース3
	(A)	(B)	(C)
性別	男性	女性	男性
自己愛傾向	高・注目	高・主張	高・注目
感情	怒り	怒り	怒り
対人認知	非がある	嫌悪感	理不尽
対処方略	話し合い	話し合い	話し合い
感情の収束	時間	我慢	解消
必要なサポート	協力者	協力者	なし
実際のサポート	なし	協力者	相談

（「時間」は「時間による感情の解消」を表す。
—は該当する回答がなかったことを示す。）

具体的なケースの内容

Table 3, 4に各ケースの具体的文脈のトランスクリプト（場面・サポート）を示す。ケース番号とともに自己愛傾向の分類を示した。分析対象者はいずれも本

研究への参加者の中で平均的に高い自己愛傾向を示していた。

Table 3. 各ケースの具体的文脈（場面）

ケース 1 （高・注目優位）

場面としては、メールでのやり取り。部活動の団体で、（全体に送る）メールを作っていて、自分が送った内容に対して、その人（B）が自分のメアド（メールアドレス）に直接意見してきた。内容がある出来事に対して、自分はそれをよく知っていたから送ったが、その人は良くわかっていなかったもので、わかりづらいと送ってきたので、ちょっと言い合いになった。自分の送った内容に対して自信があったので、わかってくれると思っていた。しかし、相手とあんまり仲が良くない方だったので、いきなり言われて腹が立った。

ケース 2 （高・主張優位）

思いがけない人からの反発。部活の全体メールである男の子（A）が急に怒ったメールを送ってきて、その標的が自分を含めて 3 人いて、それが、不条理な怒り方、自分の成績が悪いのを八つ当たりで。名指しで怒られたのもショックでした。内容が、部活の場所に鍵がかかってなかった事と、釘が落ちてたこと。いつもはさん付けで呼ぶのに呼捨てで怒られて。でもそれは言ってきた人がかけてなかったんです。でも向こうはよい成績が出なくて、機嫌悪くて、わざわざ全体にメールで送ってきて、すごい嫌悪感が。男の子なんですけど、子どもだなんて。それで喧嘩しました。

ケース 3 （高・注目優位）

部活の後で、練習の片づけで不手際があって、同い年の友達（A）から急に怒られた。相手は自分のミスを棚に上げて一方的に怒っていた。それをメールで全体に回してきた。その日機嫌が悪かったのもあって急に怒り出して。これまでもそういうことが何度もあった。

（括弧内は筆者による注釈を表す。）

Table 4. 各ケースの具体的文脈（サポート）

ケース 1 （高・注目優位）

相談してない。相手（B）が（他者に）協力を求めてたのは知らなかったもので、もしそれを知っていれば自分も見つけていただろう。あとでそれを知って、悪い意味でうまいことやるなと思った。（サポートについて）その時にはもう和解していたので、謝ってくれたので、いいかなと思った。

ケース 2 （高・主張優位）

言われた人同士で愚痴は言い合えた。でも相手に直接言わないと気持ちは発散できない。相手と会う場でちゃんとぶつかり合いたかった。言われたのは女子で、相手（A）も仲介役（C）も男子。男女の考え方は違うなあって思った。中立ではないと思う。中立でいてくれる人がいたらよかった。

ケース 3 （高・注目優位）

人は特に（ない）。

（括弧内は筆者による注釈を表す。）

考察

ケースの特徴

本研究では自我脅威場面におけるサポートの交換関係を自己愛傾向の観点から明らかにすることを目的としていた。ケース全体の文脈としては、部活動の準備に関して A が部活動の全体メールで問題提起をしたのをきっかけに、A と B の対面での言い争いに発展し、C が仲裁に入るというものであった。この事例に基づいて、自己愛傾向とサポートの交換の関係について考察する。

ケース 1 からは他者からのフィードバックを考慮せずに自信を保ち、サポートは必要ないという誇大的な自己愛傾向の特徴が見て取れる。ケース 2 では、相手からの理不尽な怒りに対して、嫌悪感を抱き怒りの感情が生起している。このケースでは愚痴を言い合うという情緒的サポートや、話し合いの場での仲介役というサポートを獲得できているが、それに対して不満を抱いている様子がうかがえる。ケース 3 では、相手の理不尽な怒りに対して怒りの感情が生起している。サポートに関しては「特にない」と述べており話し合いの結果怒りは解消している。

本研究で対象とした場面は他者との言い合いという対人葛藤場面であり、全てのケースにおいて怒りの感情が生起している。他者から何か言われたことに対して、「理不尽」、「(相手に) 非がある」、「嫌悪感」を相手に対して感じており、対人葛藤場面で怒りの感情や相手への理不尽さ・嫌悪感を抱いていることがうかがえる。Baumeister et al. (1996) の自己本

位性脅威モデルでは、他者からの否定的な反応をフィードバックとして受け取り、それを受容するか拒否するかどうかで攻撃か撤退のいずれかへ至る。今回の結果を見ると、全てのケースで「怒り」として表れている。他者からの否定的なフィードバックの処理の違いが感情として生起していると考えられる。

サポートの受け手になることに関して、高自己愛傾向・注目優位群に該当するケース 1, 3 では自我脅威状況下でサポート自体を求めていなかった。一方、高自己愛傾向・主張優位群に該当するケース 2 では「愚痴は言い合えた」、「気持ちの整理のために話を聞いてもらった」と述べるように、実際にサポートが存在しそれを利用している。ケース 1 では相手には協力者がいないと思っていたために、自身は見つけようとしていなかったことを主張しているものの、自身の主張に自信があったために積極的にサポートを希求する必要がなかったのではないかと考えられる。また、ケース 3 では怒りの感情が解消しているため、サポートの必要性を訴えなかった。全てのケースで必要なサポートは相談できる相手や協力者であり、自分の立場で状況を把握したり話を聞いてくれる人を望んでいることが示された。一方、自己愛傾向の高さゆえに実際のサポートの利用には至らないと考えられる。また、実際のサポートが存在する場合にも、ケース 2 にみられるようにサポートに不満がある場合にサポートは有効に機能しないであろう。

自己愛傾向の高い個人に有効なサポートと相談関係の構築

どのようなサポートが有効であるかは、自己愛傾向など対人認知を調整するパーソナリティと強く関連していると考えられる。本研究の結果から、自我脅威状況下で自己愛傾向の高さによってサポート希求が妨げられる可能性が示唆された。この状態では周囲にサポートが存在したとしても利用することは難しいと考えられる。そこで、自己愛傾向の特徴を考慮したうえで、周囲からの有効なサポートのあり方を考察する。

自己愛傾向の高い個人の多くは、明確な根拠が存在しないにもかかわらず自己評価を高く保っており、自己愛的脆弱性と呼ばれる精神的な不安定さを有する（上地・宮下，2009）。このように自己評価の基盤が脆弱であるため、Baumeister et al.（1996）の自己本位性脅威モデルにみられるように、周囲からの評価とのずれによって自我脅威が引き起こされ、攻撃または対人関係からの撤退へと結びつく。他者への攻撃や対人関係からの撤退は適応的でない場合が多く、根拠のない自己評価の高さ、すなわち自己愛的な自己評価は対人関係において不適応的に機能することが推察される。

自己愛傾向の高い個人が社会的に望ましい人間関係を構築するためには、自他の評価のずれに直面しても安定して自己評価を保っていられるような安定性を獲得する必要があると考えられる。これに関して Thomaes, Bushman, de Castro, Choen, & Denissen（2009）では、12～15歳の学生を対象に実際場面での実験を行

なっている。この実験から、自己の重要な側面に関して焦点付けられた自己愛傾向の高い個人は、自我脅威を受けた場合でも、日常における攻撃水準が低いままであることが明らかになった。このように自己評価に自覚的な基盤を与えることで、安定した自己評価を獲得することが可能となると考えられる。しかし、同時にこれは明確に自己評価を高めることにつながるため、過度に高めてしまった場合には、その認知特性のために他者からの評価という周囲の環境からのフィードバックを無視することとなり、環境への適応を妨げてしまうことにもなりかねない。そこで、周囲に安定して自己愛傾向の高い個人を支えることが可能となる人的な環境が存在することが必要となると考えられる。

個人を取り巻くサポート資源の概念として、ソーシャルサポートネットワークが挙げられる。ソーシャルサポートネットワーク（以下、サポートネットワーク）とは福岡・橋本（1997）によれば、「現実にその人が周囲の人々との間にもっている支持的な関係」である。この概念においては単にサポートの利用可能性を問題にするのではなく、当該個人にとってどのような人物がサポート源となり得るのか、またそのような人間関係をどの程度保持しているのかに応じて適切なサポートを行うことが重要である。一方、本研究を通じてみられたように、自己愛傾向の高い個人は、自我脅威状況下でサポートの受け手となることで脅かされる自己評価を、サポートを希求しないことによって保っていると考えられる。本研究の

結果からは、サポートの需要があるにもかかわらず個人のパーソナリティによってその認識が阻害されてしまう可能性が示唆される。自己愛傾向の高い個人を取り巻く相談体制の構築には、個人の心理傾向を考慮したうえで専門家への相談を勧めたり、ピアサポートのような相互相談関係を構築したりすることが必要であろう。

また、個別支援の際に有効な介入的アプローチとしては、communal activation と呼ばれる協調的な思考・動機づけを高める手続き的プライミングが挙げられる(e.g., Finkel, Campbell, Buffardi, Kumashiro, & Rusbult, 2009)。具体的には、他者との共通点を意識したり、他者を助ける・気遣う場面を見たりするなど、他者との協調関係に注意を向ける認知的な操作を指す。専門家への相談やピアサポート等のサポートにおいては、自己愛傾向の高い個人が他者との共通点を意識したり、他者を援助する・他者に援助される場面を想像したりするような働きかけが望まれる。本研究では自己愛性パーソナリティ障害を直接的に扱ってはいないものの、ケース1～3でみられた自己愛的な対人認知の特徴は自己愛性パーソナリティ障害にみられる症状に共通する部分もみられる。心理臨床における介入法としても communal activation は適用されていることから(e.g., Masterson, 1988)、自己愛性パーソナリティ障害のもたらす対人認知の問題に対しても、他者との協調関係を築くための介入的アプローチは有効であろう。

今後の課題

最後に本研究の課題について述べる。第一に、本研究のケースは個別事例を取り上げたため他者からの客観的な測定・観察が含まれていなかった。自己愛傾向に基づく対人認知の歪みを扱う際に、どのようにして自他の評価のずれが引き起こされるのかに関して対人相互作用の中で検討することも重要である。中山・岡田(2008)は、ペアデータを用いた対人相互作用場面において自己愛傾向の高い個人は共感を示す行動(i.e., 注視など)を取りにくいことを示唆している。実際、共感性の欠如は自己愛パーソナリティ障害の特徴の一つであり、自己愛傾向の高い個人も他者への共感性などの共同性が低いことが明らかとなっている(Campbell, Rudich, & Sedikides, 2002)。一方、自己愛傾向の高い個人は共感性を含めた自身の能力を高く評価する傾向がある(Campbell & Foster, 2007)。自他の評価のずれに加えて、対人相互作用場面において他者からの評価をどのように処理するかは、その評価者との関係にも影響を受ける。したがって、サポート源となり得る人物との相互作用場面を設定することで、自己愛傾向の高い個人にとっていかなるサポートが有効であるのかを詳細に検討することが可能となると考えられる。

第二に、中山(2008)は自我脅威の感じやすさについて、自己愛傾向が特定の領域における脅威の知覚されやすさを予測するという方向性だけではなく、自我脅威にさらされ自己評価が変動しやすい状況が、自己愛傾向を高めているという

因果の方向性を考える必要があると述べている。自己愛傾向の自己調整プロセスにおける調整変数としての機能だけでなく、その状況が自己愛傾向を高めているという逆の因果関係も検討することで、発達的に自己愛パーソナリティが形成されるプロセスを解明することにつながると考えられる。自己愛傾向を高めている要因を縦断的に検討することによって、自己愛傾向に基づく対人不適応への介入モデルを組み立てることも可能になるであろう。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000). Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Text Rev 4th ed. Washington DC: Author. (American Psychiatric Association 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き (新訂版) 医学書院)
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened Egotism, Narcissism, Self-Esteem, and Direct and Displaced Aggression: Does Self-Love or Self-Hate Lead to Violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.
- Campbell, W. K., & Foster, J. D. (2007). The narcissistic self: Background, an extended agency model, and ongoing controversies. *The Self*, 115-138.
- Campbell, W. K., & Green, J. D. (2008). Narcissism and interpersonal self-regulation. In J. V. Wood, A. Tesser, & J. G. Homes (Eds.), *The self and social relationships* (pp. 73-94). New York: Psychology Press.
- Campbell, W. K., Rudich, E. A., & Sedikides, C. (2002). Narcissism, self-esteem, and the positivity of self-views: Two portraits of self-love. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 358-368.
- 福岡欣治・橋本幸 (1997). ソーシャル・サポート・ネットワークの「広さ」と「深さ」からの指標化の試み—大学生と中年成人を対象として—同志社心理, 44, 6-23.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性—パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- Morf, C. C., & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, 12, 177-196.
- 中山留美子 (編: 小塩真司・川崎直樹)

- (2011). 自己愛の心理学—概念・測定・パーソナリティ・対人関係 第4章：自己愛の誇大性と過敏性 金子書房
- 中山留美子 (2008). 自己愛的自己調節プロセス—一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて— 教育心理学研究, 56, 127 - 141.
- 中山留美子・岡田涼 (2008). 対人相互作用場面における認知・行動は自己愛をどう反映するか 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 17, 64-65.
- 小此木啓吾 (1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 小塩真司(編:岡田努・榎本博明) (2008). パーソナリティ心理学へのアプローチ 7章：自己愛から見た自己と他者 金子書房
- 小塩真司 (2005). 自己愛傾向と対人ネガティブライフイベントに対する反応 中部大学人文学部研究論集, 14, 183-190.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴— 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 佐方哲彦 (2011). 現代のエスプリ, 522, 9-19. 至文堂
- 芝本華子 (2006). 自我脅威感尺度作成試み 日本社会心理学会ポスター発表
- Thomaes, S., Bushman, B. J., de Castro, B. O., Choen, J. L., & Denissen, J. J. A. (2009). Reducing narcissistic aggression by buttressing self-esteem: an experimental field study. *Psychological Science*, 20, 1536-1542.
- 名古屋大学大学院教育発達科学研究科・研究員

¹ 本論文は、著者が2011年度に立命館大学応用科学研究科に提出した修士論文を新たな観点からまとめ直したものである。

² 修士論文の作成に当たっては、立命館大学の岡本直子先生にご指導賜りました。ここに記して御礼申し上げます。